

実施クラス	実施日
5 歳児 さくら 組	6 月 5 日 ( 木 )

## ● 実施計画

活動テーマ		
サイエンス ～天気～ 太陽の光であそぼう		
活動テーマに関する 日頃の興味関心について		
・天気がテーマの実験を通して、太陽がある日はどうして晴れるのか、太陽の強い光に対して、「どうしてあんなに明るいのか？」と疑問を持ったりと、興味をもっている。		
活動スケジュール		環境設定 ・ 準備物
時間	内容	
9:30～9:40	・今までの天気活動を振り返り、「晴れの天気は太陽が出ている天気だったね。」「晴れだとみんなの足元に何か現れないかな？」等と問いかけ、太陽の光で現れるものについて話し合う。	【環境設定】 ・ 戶外活動が安全に実験を行えるよう、公園の選定を行う。 ・ 影遊びができそうな広く、日当たりのよい公園を調べておく。 ・ 実験に必要な道具を使いやすい場所に準備し、子どもたちが観察しやすい環境を整える。
9:40～9:50	・影について「影は見たことはある？どんな色？」「影ってどんなものだろう？」「大きさはいつも同じかな？」と問いかけ、考えたことを発表する。 ・意見はホワイトボードにまとめる。 ・今日は、影で遊んでいくことを伝える。	【準備物】 ・ 影に映して面白そうなもの ボール、縄跳び、レースの布、セロファン ※他、子どもたちが希望したもの ・ 画用紙 ・ はさみ ・ セロテープ ・ ホワイトボード ・ ホワイトボードマーカー
10:15～10:35	・園庭に行って色々な影を作って遊ぶことを伝える。「みんなが影を映したいものはなに？」「何をもっていく？」と問いかけ、園庭に持って行って影を写したいものを話し合う。 ・画用紙を好きな形に切って影を映してみることにする。「どの画用紙の色でどんな形に切る？」「それぞれの好きな色、形を作ってね。」と声をかけ、アイデアを提案し制作を援助する。【制作】 ・レースやセロファンについては、影の色についても気づきが広がるようにする。 ・園庭に移動し、実験を行う。実際にやってみる前に「どんな影が映るかな？」「何を映してみる？どうなると思う？」「あとでみんなに聞くから教えてね。」と声をかけ、どんなふうにか映るか予想し、発表する。 ・「映してみたものがどんな形だったか教えてね。」「形が変わったりするかな？」「ボールを投げる人と、影を見ている人と交代してみる？」等と声をかけながら気づきが広がるようにする。 ・園庭から戻ってから、どんな影ができたかそれぞれが発表していく。友達の意見を聞いて分かったこと、気づいたことも発表していく。 ・「どれを影に映してみた？」「映してみようだった？」「影は動いていた？止まっていた？」「影は何色だった？」「友達の発表を聞いてどうだった？一緒？違う？」等と問いかけ、発表が広がるようにする。 ・意見はホワイトボードにまとめる。 ・太陽が出ていない日、室内ならばどうなるか問いかける。 ・「晴れてない日は影はあるのかな？」「外ではなく、部屋の中には影はある？」「太陽がない夜だと影はあるかな？」「暗い部屋ならどうなるのかな？」「虹が見えている時、太陽はいるかな？」等問いかけ、活動の振り返りをするともに、次回プログラムにつながるようなまとめをする。 ・次回は、室内の中や、暗いどうなるのか遊んでいくことを提案する。	【事前準備】 ・ 影に映して面白そうなものを事前に準備しておく。 【例】 ボール、縄跳び、レースの布、セロファンなど ・ 影で映して面白そうな形を画用紙で切って見本を作っておく。 【製作】 ・ 画用紙で好きな形に切る→ハート、星型、筒状にするなど

## ● 実施報告

探究活動の実践内容	活動中の子どもの姿、声、保育者との関わり
・天気について活動を行ってきたことを振り返り繋げながら、太陽について子どもたちと学ぶ機会を作った。 ・今までの実験の経験や、実体験を通し、問いに対して子どもたちは自分の考えを自由に発表することが多かった。 ・太陽の光と影を使って遊びを行う。次のプログラムにつながるような体験や気づきを行いながら、太陽についての知見を深めることができた。また、影遊びに集中して一定の時間楽しむことができた。	【子どもの姿・声】 ・「影ってなんでできるんだろう？」「同じ画用紙なのに距離が違うと違う形になるのがふしぎ！」などの声があった。 ・大きさや影の濃さなどに注目して観察する子もいた。 ・活動の中で、子どもたちは自分の考えを積極的に発言する様子が見られた。 【保育者との関わり】 ・太陽の特性を感じられるよう、「雲がかかると影はどうなるかな？」という声掛けをし、光ち影だけでなく天気についても注目できるようにした。 ・実験結果が予想と違っても「どうしてこうなったんだろう？」と促し、考える過程を大切にしていた。

## ● 振り返り

保育者側の気づき	園長からの感想・助言内容
・日々の自然の変化に興味をもつようになり、関心を引き出すきっかけになることに気づき、実験を通じて深めることができた。 ・予測と結果が異なることを楽しみ、自然と触れ合い、特性を生かした遊びを展開しようとする姿が増えた。 ・影遊びは集中して取り組むことができ、自分で工夫して影作りを楽しんでいた。 ・これからも、身近な現象と結びつけながら、さらに子どもたちの疑問を引き出し、より深い探究へとつなげていけるよう工夫していきたい。	子どもたちの反応が、瞬発的なうえ、次々とアイデアや感じたことを発言しており、職員が驚かされることが多い。担当職員が、このクラスの子どもたちが興味を持つて意欲的に活動できるよう、活動前にしっかりと計画を練っていることが、子どもたちのねらい以上の反応や学びに繋がっている。

実施クラス	実施日
5 歳児 さくら 組	7 月 24 日 ( 木 )

## ● 実施計画

活動テーマ	
たべもの ~水~ 水ってなに？	
活動テーマに関する 日頃の興味関心について	
水を触ったときの冷たさや流れる様子、こぼれたり消えたりする不思議さに日常的に興味をもっている。「なんでぬれるの?」「なんで流れるの?」と、感覚を通じた体験から水に関心を寄せている。	
活動スケジュール	環境設定 ・ 準備物
時間	内容
9:30~9:40	・水とは何かを問いかける。  ・子どもたちの意見をホワイトボードにまとめる。
9:40~9:50	・水を水槽やコップに入れて観察してみる。  ・さまざまな形の容器に水を入れて、形の変化を探究してみる。  ・水の流れを探究してみる。  ・温度で水がどのように変化するかを調べてみる。  ・水のスロープを共同製作する。
10:30~10:40	・水の性質について確認する。
	<b>【環境設定】</b> ・安全に探究できるよう環境を設定する。 ・子どもたちが自由に発言できる雰囲気を作る。 ・正解を求めるのではなく、予想し考える態度を大切に。  <b>【活動使用教材】</b> ・水 ・絵の具(水色) ・透明のプラスチックコップ ・さまざまな形の容器(皿、コップ、袋など) ・スロープ ・電気ポット ・水 ・ホワイトボード ・ホワイトボードマーカー  <b>【事前準備】</b> ・水を扱う活動になるため、水で濡れる点に注意し、転倒などの事故を防ぐよう環境を設定しておく。 ・牛乳パックやペットボトルなどで傾斜のあるコース(スロープ)を用意しておく。子どもたちと作成しても良い。 ※切り口だけがをしないよう配慮する。 ・氷を作っておく。子どもたちと一緒に作っても良い。 ・探究活動で使用する用具の使用方法を設定しておく。

## ● 実施報告

探究活動の実践内容	活動中の子どもの姿、声、保育者との関わり
・導入では、水とはどんなものか?色々な視点から見ていき、子ども達自身で考える時間を作った。よく意見も多く出ており、「浄水場」「水道の水」「飲む水もそうだよ」など、日常生活からくるものや、自分の知識を伝えることができていた。感覚や印象から水について考える発言していた。 ・水について、色、形、においや流れ、三態と状態変化など体験を通して探究を深めた。 ・振り返りでは、気づきや調べた内容を共有し合った。	<b>【子どもの姿・声】</b> ・「水って器によって形が変わるんだね」 ・「水色って水の色とは違う。なんで絵具はこの色なんだろう?」と疑問を持つ様子が多かった。 ・水のスロープでは、何度も水を流しては道を変え、「どうしたらうまく流れるか」を試行錯誤しており、早く流すと最後まで水が流れるよという発見があり、発見を友達に共有する姿が見られた。  <b>【保育者との関わり】</b> ・子どもが見つけたことに対して、「すごいね。なんでだろう?」と問いかけを重ねることで、さらに観察や考察が深まるように意識した。 ・一人ひとりの気づきをみんなで共有できるように、「〇くんはどう思った?」と対話をつなげた。 ・こぼしたり、うまくできなかった場面では「ためしてみてもいいね!」と失敗も前向きに受け止め、再挑戦を促していった。

## ● 振り返り

保育者側の気付き	園長からの感想・助言内容
・子どもたちは、普段当たり前に触れている水に興味を持ち、自分の意見を言葉にして伝えることができていた。 ・探求心を持ち、友達との意見を共有することで、さらなる疑問が自然と生まれ、探究心がどんどん引き出されることを実感した。 ・子どもによって着目するポイントが異なり、一人ひとりの視点や感じ方に違いがあることがよくわかった。意見を出し合うことで、気づきや学びが深まる手応えがあった。 ・水のスロープでは、「こうしたらいいんじゃない?」「早く流してみる?」「角度をつけてみよう」という声が多く、自発的な体験そのものが子どもにとっての学びの原動力であることを再認識した。	夏ならではの遊びとして水遊びやプールを楽しんでいる時期に水のことを学べたのは有意義であったと思う。生活に不可欠な水に学びが深まり、大切にすること、無駄遣いしないことに繋がると思う。

実施クラス		実施日
5 歳児	さくら 組	11 月 20 日 ( 木 )
● 実施計画		
活動テーマ		
アート～ふしぎな絵～ 目の錯覚		
活動テーマに関する 日頃の興味関心について		
色や形の違いに気づいて「どうしてこう見えるの?」「混ぜたら何色になるの?」と疑問をもつ姿がある。遊びの中でもブロックや積み木を並べながら模様の変化を楽しみ、見え方の違いに興味を示している。		
活動スケジュール		環境設定 ・ 準備物
時間	内容	
9:30~9:45	・トリックアートの絵を見せ、「どう見える?」と問いかけ、興味を引き出す。	【環境設定】 ・子どもたちが見やすい位置にホワイトボードを設置する。 ・子どもたちが作業できるように机のスペースを確保する。 ・絵の細部が確認できるように、画像を大きく印刷する。 ・子どもたちが自由に発言できる雰囲気を作る。 ・正解を求めるのではなく、予想し考える態度を重視する。  【準備物】 ○トリックアートの絵 ・線が曲がって見える ・丸が見える ・丸が点滅する ・平行に見えない線 ・真ん中にたどり着けない渦巻 ・揺れて見える ・回って見える など11枚の絵  ○長さが違って見える(ホワイトボード用) ・色画用紙の短冊2枚(八つ切り画用紙の短辺×20mm) ・色画用紙の短冊4枚(10mm×20mm) ・マグネットシート(色画用紙の短冊の裏に貼るためのもの) ・ホワイトボード  ○赤い丸、どっちが大きい?(ホワイトボード用) ・70mmの赤い丸2枚 ・120mmのグレーの丸6枚 ・20mmのグレーの丸11枚 ・マグネットシート(色画用紙の丸の裏に貼るためのもの)  ○大きさ比べ(作業用) ・大きさ比べの紙:扇型(画用紙) ・ハサミ
9:45~9:50	・「どちらが長い?」「どちらが大きい?」の課題を提示し、実際と見え方の違いを考える機会を作る。  ・色画用紙の短冊や丸を使って大きさや長さの錯覚を確認する。  ・「本当にそうかな?比べてみよう!」と問いかけ、子どもたちに検証してもらうようにする。  ・「どちらが大きい?自分で作って比べてみよう」と伝え、子ども自身で作業できる機会を作る。	
9:50~10:10	・配布した紙を切り取り、実際に比べることで錯覚の仕組みを体験する。  ・「どうしてこんなふうに見えたのかな?」と問いかけ、子どもたちが考える機会を作り、意見を共有する。  ・「どう見えた?本当はどうだった?」と問いかけ、発見したことを振り返る。  ・実際に体験した錯覚について、子どもたち同士と感想を伝え合う。  ・見え方が変わる絵を自分たちで作ってみようという話しあい、期待が膨らむように声を掛ける。	
● 実施報告		
探究活動の実践内容		活動中の子どもの姿、声、保育者との関わり
目の錯覚を利用したトリックアートを体験し、視覚の不思議を感じ取った。 導入では、さまざまな錯覚の絵を観察し、視点を変えることで見え方が異なることを確認した。 その後、大きさや長さの錯覚を検証し、最終的には自分たちで実験を行いながら理解を深めた。		【子どもの姿・声】 ・「動いて見える!」と驚く声が多く上がり、友達との共有を楽しんでいた。 ・「こっちの方が長いよ」、「え、本当に同じ長さ?」と意見が分かれ、比べて確認する姿が見られた。推測と異なる結果に驚き、感想を伝えあう様子が見られた。 ・「切ってみたら同じだった!」「どうして違うように見えるんだらう?」と、自ら疑問を持ち考える様子が見られた。 【保育者との関わり】 ・「本当にそうかな?」と問いかけ、子どもたちが自分で確かめられるようにしていった。 ・絵をじっくり見る、視点を変えるなど、時間を十分に設けて体験しながら理解できるように導いた。 ・「どうしてそう見えるのかな?」と考える時間を設け、子どもたちの発言を大切にされた。
● 振り返り		
保育者側の気付き		園長からの感想・助言内容
・子どもたちはトリックアートに強い興味関心を示し、驚きながらも自分の見え方について考えており、自分の意見を頻りに交換する様子が見られた。 ・視覚の不思議を実体験することで、単に「不思議だな」と感じるだけでなく、「なぜそう見えるのか」という探究心を引き出すことができた。特に、大きさや長さの錯覚を自分で作る体験を通じて、より主体的に学ぶ姿が見られた。 ・これはどうやって作っているんだらう?と気になって図鑑や絵本等自ら開く様子が見られた。		不思議に思ったことを、自分で考え、図鑑などを持ち出して学んでみようとする姿勢まで到達できていることが、この探究が成功していると言えると思う。 子どもたちの中にある地底欲求を引き出し、満たす、とても有意義な時間になっていると思う。

実施クラス	実施日	実施保育者名
5 歳児 さくら 組	1 月 8 日 ( 木 )	木賊 優紀

## ● 実施計画

活動テーマ		
おかね ～おかねってなんだろう～ お金ってなあに？		
活動テーマに関する 日頃の興味関心について		
お年玉をもらった経験があり、お金に興味を持つ様子が見られる。また、日常生活の中で、お金の価値を少しずつ友達と話し合う様子や、自宅でお買い物等お金に触れる機会があり、興味を持っている子が多くいる。		
活動スケジュール		環境設定 ・ 準備物
時間	内容	
9:30～9:50	・お年玉の話をしていき、お金に触れるきっかけを作る。またそのお年玉をどうしたか子どもたち同士で話し合っていく。 何に使ったか、貯めるか等様々な意見交換をする。  ・「お金ってなんのためにあるのか」子どもたち同士で話し合っていく。  ・「お金がなかったらどうなるか」をより深めて話し合っていく。  ・お金の支払いの仕方を知っているものを挙げていく。  ・大昔は物と物で物々交換していたことを伝え、お金の無い世界を知り、実際の行い、体験してみる。	【環境設定】 ・子どもたちが自由に発言できる雰囲気を作り、一人ひとりの意見を尊重し、受け止める。 ・正解・不正解を明らかにするのではなく、多様な捉え方や考える姿勢・態度を大切に。  【活動使用教材】 ・模擬商品(保育室内の玩具など) ・劇等の小道具 ・ホワイトボード ・ホワイトボードマーカー  【事前準備】 ・手に持って交換できる模擬商品を用意しておく。玩具以外にも、子ども達が価値があると思う劇の小道具を用意していく。 ・「物々交換しやすいもの」と「物々交換しにくいもの」を用意しておく。
9:50～10:15	・室内の様々な玩具を一人あたり5個等、ランダムに配る。  ・自分で持っている玩具をお互い納得した上で話し合っ交換していく。  ・子どもたちにとって価値の玩具等取り入れていき、より活動を深めていく。	
10:15～10:30	・やってみて感じたことや、納得できずうまくいかなかった点などを発表し、ホワイトボードでまとめていく。  ・交換がうまくいかなかったもの等、どのようにすれば解決できるか考え、意見をまとめていく。  ・物々交換の不便さを解消するために、貝殻等で交換していたことを伝え、お金の始まり、お金の役割について話していく。  ・次回は今の日本のお金について調べることを伝え、活動を終える。	

## ● 実施報告

探究活動の実践内容	活動中の子どもの姿、声、保育者との関わり
<p>・導入で、お年玉について考えるきっかけを作り、お金への興味を持てるようにしていった。また、日常生活でお金に触れる機会を話し合っていく、支払い方法等、お金やPayPay、楽天Pay、電子マネー、クレジットカード、ポイントカード等、様々な答えが上がった。</p> <p>次に「お金がなかったらどうなるか」を考え、「ママにお願いする」「家で保護者にお願いする」「働かなきゃいけない」という意見もあり、様々な視点からお金について考えることができた。昔はお金が物々交換だったことを伝え、お金はない世界・物々交換の機会を設けていった。</p> <p>・お買い物ごっこでは、ランダムに配られた馴染みのある模擬商品を使い、物々交換を行っていった。子どもたちもよくやり取りを楽しみ、物の価値を感じながら物々交換の機会を楽しむことができた。</p> <p>交換ルールについては、物の価値を自分なりに考えながら、物によっては1個と複数個なら交換していいよと交換が成立することに気が付くことができた。</p> <p>・物々交換後の話し合いでは、交換がうまくいかなかった理由や、交換してくれない理由等話し合い、どうすれば解決できるかを子どもたち同士で考えた。</p> <p>誰も交換してくれない気持ちも味わった子からも疑問が生まれ、物々交換の限界も身をもって体験することができた。</p>	<p>【子どもの姿・声】</p> <p>・「お金って何のためにあるの？」という問いかけに対し、「生きるためにある」「お金がないと食べ物も食べられない、住むお家もなくなっちゃうからこまっちゃう」と子どもなりにお金の価値を考えて答える様子が見られた。</p> <p>・子どもたちが初めて行う物々交換だったが、物の価値を理解しながら、取り組むことができた。</p> <p>・物々交換の時、「アラジンのランプとジニーの帽子じゃ交換できないよ。ネックレスならあげてもいいけどね。」と玩具や小道具の価値を理解しながら交渉を楽しみ、活動に参加することができた。</p> <p>・活動後の振り返りでは、「友達と交換してくれなかった」「欲しかったのにどうしても手に入らなかった」と涙する子もいた。物々交換の限界を感じる子もいた。</p> <p>【保育者との関わり】</p> <p>・お年玉から活動の導入を繋げていき、探求を深めることをしていった。</p> <p>・物々交換中に「交換したくない理由はある？」と個々に声を掛け、子どもたちの考えや思いを伝えて、全体で話し合える時間を設けていった。</p> <p>・どんな意見でもまずは受け止め、子どもの思いや考え、気づきを承認する姿勢を大切に。</p>

## ● 振り返り

保育者側の気付き	園長からの感想・助言内容
<p>・子どもたちは、お年玉という身近なお金の体験をしたこともあり、興味を持って活動に参加することができた。お年玉も貯める子や使いたいものを思いっきり買った等、個々に使いたい方が多い、刺激的であった。</p> <p>・「お金が無くなったらどうなるか」の問いに、自分の考えを丁寧に伝えることができ、生きるために深く考えられる子があり、個々の気持ちや考えの成長を感じることができた。</p> <p>・物々交換を楽しみ、よく会話ややり取りを行いながら取り組むことができた。また、上手くいかなかった時に「この子と交換したら、上手いくんじゃない？」と助け舟を出す子もおり、子ども同士の深まりも感じる事ができた。</p> <p>・今回気づいたやりづらさを解消する道具としての「お金」に、より興味関心を持って取り組めるよう、今回の活動での気づきを丁寧に振り返りながら繋げていく必要があると感じた。</p>	<p>最近の子ども達は、電子マネーでの支払いなどに慣れており、お金に触れたり、数えたり、おつりをもらったりする経験がなく、お金のありがたみを実感する良い機会になったのではないかと。</p> <p>お金が無くなったらどうなるか？の問いは、家出の生活の中で、家庭での生活の中で、家庭でも大切なもののお話などがあると、理解が深まるのでは、と感じられた。</p>